

聖餐礼拝説教要旨 【2012年12月2日】

「神にはできないことはない」

エレミヤ書 第32章16節～20節
ルカによる福音書 第1章26節～38節

説教 岡村 恒牧師

マリヤにみ使いの声が響きました。「神には、なんでもできないことはありません」(37節)。私たちは礼拝のたびに、世界中のキリスト者と共に「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。」と告白しています。《受胎告知》という出来事は私たちに、全知全能の神を本当に信じているか、と問いかけています。

聖書を読む人は大勢いますが、全知全能の神に出会い、信じるようになる人は多くはいません。イエスというりっぱな人間の言動には好感を覚えることはできても、聖書によって啓示された天地の造り主なる神を信じることは、聖霊の助けなしにはあり得ません。マリヤも「どうして、そんな事があり得まじょうか。」(35節)と答えました。年若いエリサベツの妊娠も、自分自身の妊娠も、人間の常識ではあり得ないことですし、そのまま受け入れることなどできないことだからです。

アドヴェント(待降節)第1聖日を迎え、アドヴェント・クランツの1本目のろうそくに火が灯されました。「預言者のともしび」の火は、主イエスの誕生という出来事が、クリスマスのはるか以前から預言者を通して語られてきた神の約束の成就であったことを指し示しています。また同時に、やがて主イエスが再び来て下さるという約束が、必ず成就する約束であることを保証する輝きを放っています。

このともし火の前に、今朝は一人の兄弟のご遺体が横たえられています。若い日に罪の赦しの洗礼を授けられ、信仰者としてその生涯を生き抜いた兄弟です。この兄弟の遺体は、骨となって墓に葬られますが、私たちは終わりの日の復活を信じていますから、これが最後の別れないことを知っています。私たちは、主イエスを死人の中から引き上げて下さった全知全能の神を信じているので、この兄弟の復活をも信じます。ザカリヤやエリサベツ、そしてマリヤが信じたように、私たちは「神にはできないことはない」ことを信じているのです。

今朝お読みしたエレミヤ書32章には、今にも滅びようとしているエルサレムで、預言者エレミヤが神に命じられて畑を購入した出来事が記されています。国が滅びる直前に、これはほとんど無意味な行為です。しかしエレミヤは、全能の神による回復の日が来ることを、この具体的な買収証書によって人々に見せます。これは、

神の約束が必ず成就するという証言です。

ルカによる福音書は、旧約聖書に記された出来事に繰り返し光をあてながら、神を信じるように私たちを招きます。マリヤは、み使いのお告げを聞いて恐れしました。自分の人生が理不尽な神の計画によって振り回されてしまうからです。しかしこのマリヤのために、神はあらかじめ別のしるしを用意して下さいました。マリヤの親戚エリサベツの妊娠です。神の約束は、実態を伴い、現実を引き起こして実現していきます。確認可能な実例をつきつけて「神にはなんでもできないことはありません」とお語りになり、神のご計画を受け入れることができるようにお招きになるのです。

マリヤはこの時、マリヤが生むことになる男の子は特別な存在だ、と宣言されました。「彼は大いなる者となり、いと高き者の子と、となえられるでしょう。」(32節)と言われ、救い主の誕生を予告されました。本当なら、正気であることができるはずなのです。とうてい信じられない話と同時に、み使いはマリヤに、思い出せと迫ります。全地宇宙をお造りになり、一人一人の髪の毛一筋まで知り尽くしておられる方を思い起こせと迫ります。「いと高き者の力があなたをおおう」(35節)と言われ、エリサベツの身に起こったことを知って、マリヤは神の救いの計画を受け入れ、喜ぶ者となっていきます。

私たちの日常生活のただ中で、み使いは私たちに語りかけます。全知全能の神がおられ、私たち一人一人をそのみ心に留めていて下さることを思い起こせと。あなたを神の子として生かすために神が何をして下さったかを思い出し、御子イエス・キリストの死と復活によって、神があなたのために成就して下さった救いのみ業を心に留めて歩んだら良いと語るのです。

アドヴェント(待降節)に私たちは、主イエスのご降誕を祝う準備をしながら、主の再臨(到来)を心待ちにして歩みます。その日、私たちは神が全知全能の神であられることを全身全霊で確認することになります。永遠の命を頂いて、永遠の食卓を囲みながら、主の恵み深さを味わうのです。まことに全知全能の神が生きて、この私をお救い下さったことを、み使いたちと共に讃美するのです。

(記 岡村 恒)